

京都大学	博士(文学)	氏名	中 砂 明 徳
論文題目	中国近世の福建人 一士大夫と出版人		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は中国近世における福建の歴史的 position について、第一部ではこの地の士大夫に焦点を合わせ、第二部ではこの地における出版業者の活動に焦点を合わせて論ずる。福建は唐代後半になってようやく科挙の合格者を出したことが示すように後進地域であったが、宋代には合格者数で全国の首位に立った。南宋には朱子学を生み出し、朱熹が活動した建陽は当時の出版の中心地でもあった。中国近世前期の文化は、この建陽における出版を抜きにして語れない。</p> <p>「序説」では、こうした福建の歴史的あるいは地理的な位置を確認した後、南宋における士大夫社会の成立に出版が果たした役割を略述する。科挙受験と士大夫としての社交生活において、複製文化が果たした役割に注目し、朱子学の伝播にも出版が大きく貢献していたことを指摘する。</p> <p>第一部「福建士大夫と官僚社会」の第一章「劉後村と南宋士人社会」は、南宋後半期を生きた詩人劉克莊の官僚生活に焦点を当てる。劉克莊（号は後村）は南宋有数の詩人であり、『後村先生大全集』という浩瀚な文集を残しながら、再び脚光を浴びるようになったのは近年のことである。しかも、彼の官僚としての生き様にこれまで十分な注意が払われてこなかった。彼の一生をたどることは、同時に南宋中期以後の政界を語ることにともなる、と指摘する。</p> <p>本章は彼の文集を中心史料として用い、その生涯を再構成するものである。彼の郷里は12世紀後半には次々に執政級の高官を輩出していたが、史弥遠専権時代には一転して不遇をかこった。その状況を劉後村登場の前景として描き、ついで「端平更化」、史嵩之時代、その失勢期における後村の振る舞いを叙述する。従来、官僚としての劉後村については賈似道との関係がその焦点となってきたが、その前段をとりあげることで彼の官界における位置取りを明らかにし、賈似道時代を招来した南宋中後期の官界の見取り図を描いている。</p> <p>第二章「明末の閩人」では、明末福建の代表的士大夫である葉向高、董応挙、黄克纘らの書簡を素材として、当時の閩人すなわち福建士大夫の自己認識、「通倭」すなわち密貿易によって日本と通ずる者への対応を具体的に描きだす。福建人は明代でも受験強者であったが、中央官界においては傍流的存在であった。嘉靖年間以後、福建人自身が自らを語るが増えてくるが、そこでも官界における彼らの異質性がしばしば表白された。そして、同じ頃から通倭の問題が浮上してくる。葉向高、董応挙の文章には「通倭」が福建人にとっていかに深刻な問題であったかが述べられており、本</p>			

章ではとくに董応挙の軌跡に焦点を合わせて、日本による琉球併合、村山等安による船団派遣、オランダ人・鄭芝竜の登場といった諸事件における彼とその周辺の人々の言説を分析する。

第二部「歴史教科書と福建人」第三章「教科書の埃をはたく —『資治通鑑綱目』再考」では、朱熹の『資治通鑑綱目』（以下『通鑑綱目』）のテキスト受容と変容の歴史を論ずる。明代中期に建陽で出版された『通鑑綱目』「七家注本」の成立過程に注目し、その背後に真の主役として出版業者がいたことを明らかにする。近年では、『通鑑綱目』の書法を記した現行の「凡例」の素性に疑義が呈されているが、七家注が『通鑑綱目』テキストに組み込まれる過程にも不透明な部分が多々ある。とくに汪克寛「考異」と徐昭文「考証」が原型どおり取り込まれたかどうかは怪しく、この両注をはじめて集注本に収めて『文公先生資治通鑑綱目』の出版を仕掛けた劉剡による改竄が行われたのではないかと推定する。彼はその他にも多くの序文の改作と捏造にかかわった可能性が高い。その後、劉剡の一族で、七家注本を出版した劉弘毅も先輩の輩に倣って、王幼学「集覽」の手法を取り入れて「質実」を作り、序文に細工を施し、さらに丘濬『世史正綱』を混入させた。このように、劉剡・劉弘毅の二人の加工によって、近世の歴史教科書『綱目』の決定版は完成された、と論ずる。

第四章「不肖の孝子 —『少微通鑑』」は、『資治通鑑』の通俗ダイジェスト版である『少微通鑑』がどのようにテキストとして形成され、受容されたのか、その歴史を見直す。北宋末の江贄の作とされる『少微通鑑』は、中国だけでなく朝鮮においても歴史教科書として指定され、大きな影響力をもった書物であるが、これまでこれがいかなる編纂物であるか、十分に研究されてこなかった。本章ではまず、宋代では広く流布していたとする王重民の説に根拠がないことを指摘し、またすでに元代において、数種の『少微通鑑』が出ていたことを確認する。論者は、明代の王逢・劉剡のコンビが面目を改めて出したテキストが以後の普及版のもとになった、とする点では王重民の説を認めながらも、さらに王・劉の具体的な編集過程を検討することによって、『少微通鑑』の特色を明らかにする。その編集の主体は劉剡であり、目玉である『通鑑綱目』の正統論を導入したほか、いくつかの改変を施し、劉恕『通鑑外紀』の部分にも手を加えている。劉剡はさらに宋・元時代を扱った『節要統編』を編纂したが、正編同様に正統論を標榜しながら、それは朱子のそれと同じではない。また、南宋史の部分に彼の一族の事跡を盛り込んだほか、元代の記事において自らの他の編纂物を適当にアレンジして組み込むなど、良心的な編集とは言いがたいところがま見られる。しかし、出来はともかくとして、ここに中国古代から元末までの通史がセットとして成立したことの意義は小さくない。そして、ここでも『通鑑綱目』のケース同様に劉弘毅が増補を施している。この劉弘毅本が明後期の諸『節要』本の原基となり、歴史教科書として大きな影響力を持ったとする。

第五章「『通鑑』のインブリード」では、『少微通鑑』を母体にして『綱目』の記事

を組み込んだ「綱鑑」について論ずる。インブリードとは馬の血統上の用語で、近親配合を意味する。明末に主に建陽で出版された「綱鑑」には、本文の繁簡を含めて実に多くのテキストが存在している。これはこれらの書にそれだけ需要があったことを示している。そのうち最も普及したのが、和刻もある袁黄（袁了凡）『歴史綱鑑補』である。本書の成立について、王重民は編者袁了凡が仮託であることを明らかにし、また建陽出版人である余象斗が先行出版したものの看板をすげかえたものに過ぎないとし、この主張は後の研究者にそのまま踏襲されている。しかし、中身を検討すると、実際にはかなりの改変が施されていることが分かる。その改変は建陽熊氏が出版した『玉堂鑑綱』の刺激を受けてなされたものであった。テキストを相互比較することによって、先行作を意識しつつ激しい出版競争が繰り広げられていたことが明らかになる、と結論づける。

「結語」では、再び福建の文化史的位罫を確認する。福建人はこの地で朱子学が生まれただけでなくそこが出版の中心地でもあったため、学術および科挙の合格者の多さという両面において高いプライドを持ったが、一面で対日密貿易の拠点であるというコンプレックスを懐いていた、と結論づける。

(論文審査の結果の要旨)

福建が中国史研究の上でとくに注目されるのは、宋代以降についてである。なぜなら宋代になると、この地から科挙の進士合格者を全国で最も多く輩出するに至ったし、南宋時代には朱熹という大思想家を生み出し、朱子学はこれ以降ほぼ一貫して国家の正統学問の地位にあり続けたからである。また福建内陸部にある建陽は、宋代からすでに出版業にかかわる一大中心地となっていたが、明代になると日用書や通俗小説を多く出版する地として有名になった。その沿岸地帯も海外貿易、なかでも日本との密貿易の拠点としてこれまた有名であった。本論文は主にこの南宋時代と明代に題材をとり、中国福建が生み出した士大夫たちの生き様と自己認識、およびこの地の出版業者による通俗歴史書の編纂というユニークなテーマを論じたものである。二部構成からなるが、このうち第二部は司馬光の『資治通鑑』と朱熹が編纂したとされる『資治通鑑綱目』(以下『通鑑綱目』)のダイジェスト版あるいはその注釈本について、一貫した観点から詳細に論じたものであって、分量からいっても全体の三分の二を占める。従ってここでは、この第二部を中心に論評することにしよう。

司馬光の『資治通鑑』は司馬遷の『史記』とともに、中国で生み出された歴史名著として有名であるが、それがあまりに広瀚なために士大夫ですら簡単に通読できるものではなかった。このため通俗書の出版を得意とした福建建陽では様々なダイジェスト版が出版され、科挙受験生をはじめとする数多くの人々の求めに応じていた。論者が考察の対象とする『少微通鑑』も、その一つに他ならない(第四章)。

一方、『通鑑綱目』は朱熹自身が編纂したダイジェスト版とされただけでなく、そこには大義名分論(正統論)など彼の歴史思想が盛られていると考えられたため、数多くの注釈書が作られた。明代中頃になると建陽の有名な出版業者劉弘毅は先行する七種の注釈書の合注本を出版しており、論者はこれを「七家注本」と称して考証する(第三章)。

さらに明末の建陽では、これら『資治通鑑』と『通鑑綱目』とを合体させ、「綱鑑」と総称する通俗歴史書も数多く出版された。そのうち論者が取り上げたのは、これらのうちで最も普及し、日本へ輸入されると和刻本まで出されるに至った袁黄(袁了凡)の『歴史綱鑑補』である(第五章)。

さて、いずれも通俗歴史書であるが、時に教科書ともされた『少微通鑑』、七家注本『通鑑綱目』そして『歴史綱鑑補』がいったいどのように編纂されたのか、この問題にたいしてこれまで中国を含めた世界の学界で、誰一人として論者のように詳細に検討を加えた者はいなかった。清朝考証学者たちにとっては、明代の学術そのものが蔑視の対象であったし、ましてやダイジェスト版の通俗書などは研究の対象にもならなかった。現在、中国出版史にたずさわる研究者は多いが、テキストそのものの中に分け入り分析するという、手間のかかる作業をまともにする者はいなかったのである。論者がこの問題に迫るために取った方法は、テキストの内容に即して他の文献と比較

しつつ考証し、矛盾と疑わしいところとを抉り出すという、きわめてオーソドックスなやり方である。

その結果として論者が明らかにしたいいくつかは、おおよそ次の通りである。『少微通鑑』は北宋末の人、少微先生江贄によって編纂されたとされるが、これは疑わしい。したがってこの書が宋代にすでに広く行われていたとする著名な書誌学者、王重民の説も疑わしい。また七家注本『通鑑綱目』に採録された注釈本の作成者七人を一人一人洗い出し、そこに「序文」として記されるものの素性を洗った結果、何人かの注は改竄して採録されたもので、序文の多くも有名な学者の名を盗用したり文章を勝手に改竄し偽装したものであることは明らかである。また注釈を作るのに「十年間に五回改稿した」などとあるが、実際にそこに示される注はあまりに安直なものである。袁黄『歴史綱鑑補』もその実、彼の名声に仮託したものである。論者はさらに、この書が『資治通鑑』と『通鑑綱目』そのものを合体させるという手間をかけた作品ではなく、ダイジェスト版『少微通鑑』と『通鑑綱目』とを合体させたものにすぎないことを暴き出し、さらにこれは有名な出版業者である余象斗が、同じ建陽の熊氏によって先行出版された『玉堂鑑綱』に刺激され編纂したものであることを明らかにする。そしてこのような通俗歴史書が多量に手を換え品を換えて出版された背景として、当時彼らを取り巻いていた激しい出版競争があったことを指摘する。時に歴史教科書にまでされるに至ったこれらの書物は、このように怪しげな出版業者の手によって編纂されたのである。見事な考証と言うべきであって、ここに示された見解の多くは当分の間、乗り越えられることがないと考えられる。

明末に福建沿岸部で盛んに行われた対日密貿易に対して、当地の士大夫たちがどのように見ていたかを論じた第二章も優れている。ここでは彼らが持った福建人コンプレックスというべきものが論じられるが、むしろ評価すべきは、本章が明末福建の対外関係史を通観しているところである。本章は今後、中国明末の対外関係史あるいは対日貿易史を研究するものにとって必読文献になるであろう。また第一章で扱われる南宋福建人の劉克莊（劉後村）も、論者が「おしゃべり」で「無責任」と評するとおりの人物であって、宋代士大夫の一類型を端的に描き出したものとして興味深い。全体を通じて見える文献読解の確かさも、高く評価すべきである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2012年11月7日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。